

国立国語研究所学術情報リポジトリ

開会の挨拶

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 影山, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000915

開会の挨拶

国立国語研究所所長 影山太郎

みなさま、よくいらつしやいました。国立国語研究所所長の影山でございます。今日は三月十日。明日三月十一日は、あの未曾有の大災害が起こってからちょうど二年目に当たりますが、被災地の復興はまだ途上でございます。私たちは、今日このような楽しい講演会を開くことができますことを幸せに感じたいと思います。

さて、大学共同利用機関になってから国立国語研究所は年に一、二度、一般市民のための公開フォーラムを開催していきまして、今回が六回目となります。本日のテーマは「グローバル社会における日本語のコミュニケーション」ということで、おそらくこういう機会であれば決して顔を合わせることもないであろうと思われる五人の多彩な講師を特別にご用意いたしました。講演の順番で紹介しますと、まず、NHKテレビの英会話でご活躍の鳥飼玖美子さん。鳥飼さんは、英語教育や異文化理解の専門家で、国際共通語としての英語や日本の小学校における英語教育についても多数の著書を出しておられます。今回のテーマが日本語のコミュニケーションであるのに、英語ご専門の鳥飼さんを先頭に持ってきた理由は、あとで分かることでしょう。次の講演者は、国語研の日本語教育研究・情報センター長の迫田久美子さんで、外国人に対する日本語教育の研究一筋でやってこられました。このお二人の総論的なお話の後、十五分の休憩をはさんで、後半はより具体的な話に移ります。今回、特別ゲストとしてお二人の外国出身の方をお招きしています。莫^モ邦富^{バンフ}さんは中国出身の経済ジャーナリスト兼作家で、中国語の入門や日中両国の相互理解などに関して多数の著書を出版されています。講演では、ご自身がどのような日本語を勉強されたかというお話が聞けるものと思います。国際交流基金日本語国際センター所長の西原鈴子さんは外国人に対する日本語教育の専門家で、アメリカ、日本、その他の国々で日本語教育を実践されてきました。そして、今日の取りをつとめていただくのが、テレビ等でお馴染み、ダニエル・カールさん。カールさんはアメリカ・カリフォルニア生まれで山形育ち、タレント、翻訳家、実業家、評論家、司会者として活躍されるほか、山形弁をこよなく愛する山形弁研究家でもいらつしやいます。そして、これらの講師をとりまとめる司会が国語研の野田尚史さん。野田さんは日本語文法および日本語教育の専門家です。



おそらく皆様は、「なんとまた多彩なメンバーだろう」、「いったいまた、なんでこんな取り合わせ？」とお思いのことでしょう。このような多彩な講師陣になったのは、「グローバル社会における日本語のコミュニケーション」という広大なテーマをできるだけ多角的に論じたいと考えたからに他なりません。今日の話の展開は、実は私も読めないところがあるのですが、おそらく、外国語と日本語という観点から迫っていくものと思います。しかしながら、コミュニケーションの問題は、実は、日本人同士の日本語の会話でも、あるいはアメリカ人同士の英語の会話でも、常に起こっています。最近、NHKが国内の企業に対し、社員の言葉遣いについてアンケートをとったところ、多くの企業人が、「上司と部下のコミュニケーションができていない」とか「新入社員は、日本語のコミュニケーション力が不足している」とかいった回答をしてきたそうです。しかしそれは会社に限ったことではありませんね。家庭の中でも、夫婦間のコミュニケーション不足で離婚が起こる、あるいは、親と子供の間のコミュニケーション不足で学校でトラブルを起こすというように、日本人の間でも「コミュニケーション力」というのがキーワードになっています。

同じことは、おそらくどの国でも、どの言語でも起こり得ることです。Deborah Tannen (デボラ・タネン) というアメリカ人の言語学者が、アメリカ人同士の英語会話を録音して分析した本が何冊か出ていまして、ひとつの事例として、こういうのがありました。

アメリカ人同士の夫婦。夫はビジネスマンで、会社ではとてもよく働き、社内での会話や、取引先との会話は非常に上手で雄弁です。パーティの席でも、常に面白い話をして、みんなが彼のそばに寄ってくる。ところが、この旦那さん、家に帰ると一変します。奥さんが「今日は、会社、どうだった？」と聞いても、「ああ、疲れた。」とか「大変だ。」とか「男は外に出れば戦場だ。」というだけで、面白い話は全然しません。奥さんは、この亭主が会社やパーティでは話し上手だということを知っているので、どうして家ではこんなにブスツとしているのか、私のことが嫌いなのか、と思ってしまう。これはアメリカ人の話ですよ。しかし日本でも同じことがよくありますねえ。

こういうことの起こる理由を、Tannenは次のように分析しました。Tannenによると、一般に男性というのは、自分の言いたいことだけを言う。事実をそのまま語るのが言語だと思っている。Tannenは、男性の言葉遣いを Report Talk (レポート・トーク) と名付けました。つまり大学のレポートのように、事実や自分の知っている知識だけを相手に伝えるということ。これに対して、女性の言葉遣いはどうでしょうか。日本では「女三人寄せ

ばかしましい」と言いますが、英語も似たようなもので、「Three women make a market(女三人寄れば、市場のようににぎやかだ)」という諺があるそうです。Tannenによれば、決して、女性がおしゃべりだということではなく、女性がしゃべる目的が、単に事実を述べるだけでなく、話し相手と親密な関係を持つ、話をする事で心と心の絆を強くする、ということらしいです。これを、TannenはRapport Talk(レポート・トーク)と呼びました。Rapportとは「相手との協調性、信頼関係、つまり絆」ということですから、女性同士が常におしゃべりをしてるのは、話の相手そのものより、むしろ、相手との関係、相手との絆を深めるためであるということになります。

そもそも、communicationという言葉は、ラテン語のcommunicare(分かち与える)という言葉から来ています。「分かち与える」というからには、「何を」分かち与えるのかという中身(コンテンツ)と、「どのように分かち与えるか」という話し方の作法が大切です。Tannenはレポート・トークとレポート・トークの違いを、男性と女性の違いと捉えたのですが、むしろコミュニケーションの中身とコミュニケーションの作法の違いと捉えるべきでしょう。話す中身と、話すときの作法(つまり、敬語が必要なのか、ため口でも良いのかといった話し方)をきちんとわきまえていけば、私たちの日常のコミュニケーションギャップも、たいていは解消できるのではないのでしょうか。今やグローバル化によって、英語が世界共通の言語になっています。日本でも、多くの企業が社内の会議で英語を使い、小学校でも英語を教えるようになってきました。また、昨今では、文学離れ、アニメブームと活字離れ、メールやブログ、ツイッターなど人工的な原因によって、若者がきちんとした日本語の文章を書けなくなっています。加えて、世界各地から外国の人たちがたくさん日本に移り住み、その人たちは、なんとか日本語を勉強して日本で生活したいと思っています。こういった状況の中で、十年後、二十年後の日本語の姿はどうなっているのでしょうか。今日の講演会は、「日本語を学ぶことはなぜ必要か」という副題が付いています。「なぜ必要か」という疑問文は、「日本語が必要である」ということを前提にしているわけですが、現在の日本語を論じるということとは、結局、日本語の将来の姿を論じることにもつながってきます。

日本語の将来をも見据えて、私たちの日本語の大切さ、日本語のおもしろさ、日本語の必要性を考えるための四時間です。どうぞ、最後までお楽しみください。